

# 松岡研究室 解説論文・文献リスト

平成29年1月31日 現在

番号	著書、学術論文等の名称	著者	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等又は 発表学会等の名称	概要
60.	工業デザインにおけるプラスチックの魅力因子	加藤健郎 松岡由幸	平成30年8月 30日	成形加工 第30巻第9号 pp.458-461	近年開発された新たなプラスチック製品に関する調査と分析を述べた。プラスチックの工業デザインにおける「魅力因子」と「製品カテゴリー」も紹介した。
59.	巻頭言 プラスチック独自の美と魅力を求めて	松岡由幸	平成30年8月 30日	成形加工 第30巻第9号 pp.453	プラスチックの逆襲の好機、到来。デザインの立場から考えるプラスチックの新たなありようと、独自の魅力を述べた。
58.	タイムアクシスデザインとUXデザイン	松岡由幸	平成30年6月5 日	日本機械学会誌6月号 pp.18-21	タイムアクシスデザイン (TAD) の概要と、価値成長デザインの4タイプ、およびTADが拓く未来社会への展望について述べた。
57.	人間とAI, その創造性の「あいだ」	松岡由幸	平成30年5月 20日	デザイン関連学会シンポジウム	AIが発想力を持つと近い将来モノづくり産業がどう変わるかという展望を述べた。また、デザインにおける「哲学」の重要性について述べた。
56.	次世代モビリティのタイムアクシスデザイン	古郡了 末富隆雅 加藤健郎 中澤和夫 松岡由幸	平成30年2月	設計工学vol.53 2018年2月 pp.153-159	タイムアクシスデザインの適用事例として、自動車に価値成長デザインを応用した価値成長モビリティを考案した。同モビリティの概要および創発型制御システムの効果検証について紹介した。
55.	タイムアクシスデザインに基づく人工物の価値成長デザイン	加藤健郎 佐藤浩一郎 松岡由幸	平成30年2月	設計工学vol.53 2018年2月 pp.147-152	人工物の価値を成長させる「価値成長デザイン」の概要と、社会へもたらす効果について述べた。また同デザインを実施するための方法に関する研究も紹介した。
54.	「モノづくり×モノづかい」のためのタイムアクシスデザイン	松岡由幸	平成30年2月	設計工学vol.53 2018年2月 pp.129-133	タイムアクシス(時間軸)をデザインの理論や方法論に導入した「タイムアクシスデザイン」の概念、その応用領域について述べた。同デザインが拓く未来社会の可能性についても展望した。
53.	農業デザインのすゝめ	松岡由幸	平成29年4月 30日	日本デザイン学会誌デザイン学研究特集号vol.24/No.4 pp.1-2	農業デザインのすゝめと題して、日本デザイン学会第63回春季研究発表大会(2016年)におけるオーガナイズドセッションで議論したことをとりまとめ、今後の日本における農業デザインの必要性を説いた。
52.	デザインの哲学～豊かさを再考する	松岡由幸	平成29年2月	日本デザイン学会誌デザイン学研究特集号vol.24/No.2 pp.38-39	2016年10月1日に日本デザイン学会秋季企画大会内で行われたパネルディスカッションのレポート記事。
51.	デザイン哲学～豊かさを再考するデザインは、『安心』と『欲望』の狭間で何を考えるか	松岡由幸	平成29年2月	日本デザイン学会誌デザイン学研究特集号Vol.24-2 No.94 2017年2月1日 pp.36-37	人工物の大規模化・複雑化の推進によって生じた環境問題や安全問題について述べるとともに、同問題の解決に当たるうえで重要な学問とされるデザイン科学とデザイン哲学の両者について概説した。そのなかで、個人や社会の哲学を共有・議論する「哲学共考」と重要性について述べた。
50.	「モノづくり」×「モノづかい」の次世代型自動車ビジネスモデル：タイムアクシスデザイン(時間軸設計)の時代	松岡由幸	平成28年11月	日刊工業新聞 2016年11月30日 8面	本稿は、2016年8月23日(火)～25日(木)中国・上海新国際博覧中心W3館にて開催された「カーテストングチャイナ2016 (Car Testing/Electronics/Automation China 2016 Automotive Technology Days China 2016)」の取材記事。「つくる」と「つかう」を融合させた新ビジネスモデルについて言及した。

49.	創立50周年記念 設計フォーラム (『創造性教育と設計～設計工学× デザイン学の共創～』パネルディス カッション)解説記事	松岡由幸	平成28年10月	設計工学 vol.51 2016年10月 pp.693-697	本稿は、2016年5月に行われた日本設計工学会創 立50周年記念行事内で行われた、講演者による 『創造性教育と設計～設計工学×デザイン学の共 創～』というテーマの下、記念パネルディスカ ッションが行われ、その内容について解説したも のである。
48.	デザインの哲学-豊かさを再考する	松岡由幸	平成28年10月	日刊工業新聞 2016年10月7日 26面	本稿は、2016年10月1日、武蔵野美術大学新宿教 室で行われた日本デザイン学会秋季企画大会が行 われ、「デザインの哲学-豊かさを再考する」を テーマに行った講演やパネル討論についての取材 記事。デザイナー個人の未来館をもとに、主体性 をもってデザインを行うことの重要性について言 及した。
47.	デザイン科学と多空間デザインモデ ル(創造性を育むデザインの統合の 視点から)	松岡由幸	平成28年10月	設計工学 vol.51 2016年10月 pp.678-685	本稿では、機械化、分業化、専門化の流れを経て 細分化・効率化される個々のデザイン(設計)を統 合可能とするデザイン科学の枠組みの必要性を説 くとともに、その一つである多空間デザインモデ ルを提示し、それに基づくデザインの統合化、並 びに今後のデザイン展望を示した。
46.	『つかう』デザインのすゝめ - 「モノづくり」+ 「モノづかい」 の産業化にむけて -	松岡由幸	平成28年7月	日刊工業新聞 2016年7月28日 16面	本稿では、「つくる」と「つかう」の関係から、 「つかう」デザインに注目した。さらに、「つく る」と「つかう」の相乗効果を生む「モノづく り」と「モノづかい」を一体化させた産業化につ いても言及した。近年の「つくる」と「つかう」 の関係に、多様性が生まれつつあり、このこと について再考していく必要性について述べた。
45.	革新的ものづくり-タイム軸シ ステムデザイン(時間軸設計)とそのモビ リティシステムへの応用-	松岡由幸	平成27年12月	日刊工業新聞 2015年12月21日 6面	中国・上海で行われた自動車関連の企業・専門家 による展示会・セミナー『第四回カーテスト ング・チャイナ2015(日刊工業新聞社共催)』にて松 岡由幸教授が講演された『革新的ものづくり タイム軸システムデザイン(時間軸設計)とそのモビ リティシステムへの応用』のレポート記事が掲載さ れた。
44.	『価値成長』デザインのすゝめ 使い捨て社会からの脱却に向けた、 新たなモノづくり	松岡由幸	平成27年7月	日刊工業新聞 2015年7月28日 16面	
43.	プラスチックの逆襲	松岡由幸	平成27年6月	日刊工業新聞 2015年6月26日 6面	
42.	慶應義塾大学 -松岡研究室-	松岡由幸 佐藤浩一郎	平成27年1月	色材協会誌 Vol.88, No.2, pp.56-58	慶應義塾大学松岡研究室における研究活動を紹 介するとともに、連携組織である「デザイン塾」に ついて述べた。研究内容としては、「新しい意匠 性を有する質感の表面処理開発」、「プラスチ ックの新価値創生研究-“プラスチックの逆襲”」、 および「材料のタイム軸システムデザイン研究」に ついて概説した。
41.	「創発」デザインのすゝめ	松岡由幸	平成26年7月	日刊工業新聞 2014年7月24日 16面	部分から全体を創出する創発現象と創発デザイン の関係性について概説するとともに、「創めるマ インド」としての創発デザインの重要性和新たな 価値創造に向けた製品開発の新展開への期待を述 べた。
40.	デザイン科学における横幹型活動	松岡由幸	平成26年5月	横幹連合ニュースレター No.37	「デザインという創造的行為における法則性の解 明と、デザイン行為に用いられる様々な知識の体 系化を狙いとする学問」であるデザイン科学につ いて、横幹連合との関係をまじえながら紹介し た。

39.	「多空間」デザインのすすめ	<u>松岡由幸</u>	平成25年7月	日刊工業新聞 2013年7月25日 14面	日本のものづくりに対する期待として、これまでの先進性とデザイン科学という新たな学問の所産である多空間のデザイン思考を活かした、「自由な思考」と「理にかなった思考」の両立による新たな価値創造の実現可能性について述べた。
38.	走行場を学習し判断する創発型制御システムの研究	古郡了 山崎卓 黒田康秀 農沢隆秀 末富隆雅 氏家良樹 中澤和夫 <u>松岡由幸</u>	平成24年11月	マツダ技報 No.30 pp.209-213	本稿で提案する創発型制御システムは、未知の走行場を走行しても、走行場を判断し獲得していく機能を持ち、走行場に対応した新しい制御を創発していくシステムである。今回、創発型制御システムの基本アルゴリズムを開発し、低燃費化とバッテリー寿命向上を目的としたハイブリッド車のエンジン制御に適用した。走行場を推定し、走行場ごとに制御を運転者に適応させることにより、より大きな燃費・バッテリー寿命向上効果があることを確認した。
37.	「タイムアクシス」デザインのすすめ	<u>松岡由幸</u>	平成24年7月	日刊工業新聞 2012年7月26日 14面	日本独自の産業化と再生に向けて、時間軸に注目する「タイムアクシス・デザイン」を論じた。タイムアクシス・デザインを実現するための「育つ」技術と「育てる」技術を述べるとともに、手工芸品に見られる価値成長デザインについても紹介した。
36.	タイムアクシス・デザイン理論を応用したバイオインスパイアード・ビークル	氏家良樹 高野修治 中澤和夫 <u>松岡由幸</u>	平成24年4月	横幹 Vol.6, No.1 pp.34-41	本稿では、バイオインスパイアード・ビークルシステムの概念デザインをうけて実施された、さまざまな技術シーズの活用とそれに基づくビークル本体の基本デザインを中心に述べた。具体的には、ビークルのデザイン展開に用いる多空間デザイン法の概要、マルチタイムスケールモデルおよびバイオインスパイアード・デザインを導入した多空間デザイン法によるビークルのデザイン展開、ビークルの概要およびタイムアクシス・デザインを観点とした考察を述べた。
35.	次世代モビリティにおける価値成長デザイン	古郡了 山崎卓 黒田康秀 末富隆雅 農沢隆秀 氏家良樹 中澤和夫 <u>松岡由幸</u>	平成24年4月	横幹 Vol.6, No.1 pp.27-33	実用価値と精神価値が購入時よりも向上していく価値成長デザインの一例として価値成長モビリティを提案した。その価値成長を長期的に管理するコアモジュールとして、創発型制御システムを考案した。本論文では、開発した創発型制御システムのコンセプトと基本デザインの概要を述べ、創発型制御システムを用いることにより価値成長効果を検証した一事例について示した。
34.	タイムアクシス・デザインの具現化に向けた価値成長デザインモデルの提案	佐藤浩一郎 <u>松岡由幸</u>	平成24年4月	横幹、 Vol.6, No.1, pp.21-26	本稿では、価値成長デザイン方法論の構築の一助とするため、人工物の価値成長における特徴の明確化と事例調査や文献調査に対する解析を行った。そして、これらの結果に基づいた価値成長デザインモデルの提案をした。さらに、提案した価値成長デザインモデルに有用であると考えられる視点について述べた。
33.	タイムアクシス・デザインの概念	<u>松岡由幸</u>	平成24年4月	横幹 Vol.6, No.1 pp.9-16	本稿においては時間軸を組み込んだ新たなデザインのパラダイムとして提唱されている「タイムアクシス・デザイン」の概念を紹介した。2章にて、未来社会展望とそれらの課題、3章にて未来社会展望に基づく新たなデザインコンセプトであるタイムアクシス・デザイン、4章にてタイムアクシス・デザインに用いるモデルを述べ、最後にタイムアクシス・デザインがもたらす新たな可能性について言及した。

32.	インダストリアルデザインとエンジニアリングデザインの「あいだ」	<u>松岡由幸</u>	平成23年11月	精密工学会誌 Vol.77, No.11 pp.998-1002	本稿では、インダストリアルデザインとエンジニアリングデザインの「あいだ」に関して、その分業化・専門化の文脈、両デザインの特徴比較、さらにDesign統合のための視点を論ずること で、その統合に向けた一つの枠組みとしての多空間デザインモデルを提案した。また、本モデルをデザインの実務面や研究面へ応用した事例を紹介することで、そのモデルのDesign統合における枠組みとしての有効性を論じた。
31.	「ロバスト」デザインのすすめ	<u>松岡由幸</u>	平成23年7月	日刊工業新聞 2011年7月26日 14面	東日本大震災においても浮き彫りとなった安全とコストというトレードオフ問題とそこから発生する想定外問題の解決の糸口となる方法のひとつとして、ロバストデザインを概説した。さらに、ロバストデザインにより生まれる製品のロバスト性に注目するものづくりの再考について述べた。
30.	多空間を用いた設計手法の開発	<u>松岡由幸</u>	平成22年11月	機械設計 Vol.54, No.12 pp.76-77	設計開発に関する様々な要素を分類・整理し、設計開発内容のチェックから設計開発プロセスの構築まで、設計開発における様々な意思決定の際に有効である多空間QFDについて、その特徴・効果を交えながら紹介した。
29.	「状態」デザインのすすめ	<u>松岡由幸</u>	平成22年7月	日刊工業新聞 2010年7月27日 16面	デザイナーとエンジニア（設計者）の両者におけるマインドの違いを示すとともに、製品と使用環境などの場の関係性を示す「状態」に注目したデザインの重要性について概説した。
28.	デザインの科学	<u>松岡由幸</u>	平成21年8月	日本機械学会誌 Vol.112, No.1089 p.60	デザインシンポジウム 2008開催の概要を述べるとともに、今日までのデザインが抱える課題を示し、それら課題に取り組むためのデザイン科学の必要性を概説した。
27.	デザイン シンポジウム 2008 開催報告	<u>松岡由幸</u>	平成21年4月	日本機械学会 設計工学システム部門Newsletter No.30	平成20年11月21日(金)、22日(土)の両日に渡り、慶應義塾大学理工学部矢上キャンパスを会場として、本日本機械学会 設計工学・システム部門のほか、日本デザイン学会、日本設計工学会、日本建築学会、精密工学会、人工知能学会の6学会による合同共催のもと、デザイン シンポジウム 2008 が開催の概要を述べた。
26.	Artificial Joint System Interacting with Organism	亀山雄高 井上全人 稲場公崇 播野修 守谷徳広 加藤健郎 須賀孝太郎 渡邊誠 <u>松岡由幸</u>	平成20年3月	デザイン学研究特集号 Vol.15, No.4 pp.54-57	「生命と対話人工関節システム」というコンセプトのもと、人工関節を使用する患者のQOL (Quality of Life)の向上を目標として、マイクロ・メゾ・マクロスケールの3つのアスペクトから新しい人工関節システムを提案した。
25.	Life - Support Vehicle for 2	氏家良樹 北村武士 弓矢将成 吾妻真人 平山崇司 仁戸田健吾 日尾遼兵 池町優太 大内真紀 古屋繁 <u>松岡由幸</u>	平成20年3月	デザイン学研究特集号、 Vol.15, No.4, pp.50-53	車椅子利用者とそのパートナーの関係における新しいライフスタイルの創生を目指し、基礎研究の技術シーズを活用した「Vehicle-car」と「Vehicle-chair」のインテグレーションによる、新しいビークルシステムの提案を行った。

24.	Biologically Inspired Medical Operation System - BIMOS -	氏家良樹 上田祐介 緒方仁是 樋野俊之 向坊由佳 森田宏 吉原和歌子 松本大 五十嵐浩也 <u>松岡由幸</u>	平成20年3月	デザイン学研究特集号、 Vol.15, No.4, pp.46-49	患者と医師の両者に対する負担が少ない医療を目指し、デザインと工学の二つのアスペクトに焦点を合わせた「基礎研究型協調デザイン」と「生命システムの模倣」の適用による、新しい手術システムを提案した。
23.	“Inventive Creation” of Digital Design	<u>松岡由幸</u>	平成20年3月	デザイン学研究特集号 Vol.15, No.4 p.1	現状のデザインを取り巻く環境における課題の解決に向けて、デジタルデザインの成長が期待されていること、およびその成長を見守りつづけ、それを在るべき方向へ育てていく必要性について述べた。
22.	デザイン哲学と科学は、「安心」と「欲望」の狭間で何を考えるか？	<u>松岡由幸</u>	平成20年3月	デザイン学研究特集号 Vol.15, No.3 p.55	「安心」を確保するために、デザイン哲学を再生させ、これまでの経済至上主義に立ち向かうこと、また、新たなデザイン科学とその枠組みを構築することで21世紀に増加する想定外問題に対応することも、ある意味、いずれも人類の「欲望」との戦いであり、「安心」と「欲望」の狭間で、より良い社会を実現させることこそが、21世紀のデザインに真に問われている重要課題であることを述べた。
21.	System Design : Paradigm Shift from Intelligence to Life	<u>松岡由幸</u> 共著	平成20年3月	21st Century COE Program Keio University pp.60-68、pp.149-158	まず、「Section 3.3, Incorporating Life-based Concept into Design, its Context and Viewpoint」において、デザインの文脈として、18世紀には「機械化」、19世紀には「分業化」、20世紀には「専門化」が行われことを述べ、その流れに基づき、21世紀にはデザインの「統合化」が進んでいく可能性を示した。そして、統合化の1つである「生命化」の概念を「目的」「対象」「方法」という3つの項目についてまとめるとともに、デザインの一般性を記述する統合デザインモデルの観点から生命化の具体的な方策について考察を行った。つぎに、「Section 4.4, Life Inspired Design」において、慶應先端デザインスクールで行われたデザイン事例のうち、デザインの生命化における「目的」「対象」「方法」の項目についてそれぞれ対応するものを挙げ、生命化に基づくデザイン展開の具体的な内容を紹介した。
20.	「21世紀、デザイン教育の再考」参加報告	<u>松岡由幸</u> 氏家良樹	平成19年12月	JIDA Hotline News Vol.79 pp.4-5	日本デザイン学会第54回研究発表大会（平成19年6月22日～24日、静岡文化芸術大学）において開催されたオーガナイズドセッション「21世紀、デザイン教育の再考」（オーガナイザ：松岡由幸）の参加報告を行った。
19.	創発設計とその応用の可能性	<u>松岡由幸</u>	平成19年10月	設計工学 Vol.42, No.10 pp.1-9	大域的な解探索を行い、多様な設計解を導出することが可能な「創発設計」の概要について述べ、「創発設計」の応用の1つである創発設計システムと適用事例について紹介した。
18.	ロバスト設計方法の展望	<u>松岡由幸</u>	平成17年10月	デザイン学研究特集号 Vol.13, No.2 pp.36-37	平成13年度デザイン学研究掲載論文「多様場対応型ロバスト設計方法の構築」（年間論文賞受賞）の概説およびその後の展開について解説した。

17.	生体と対話する人工関節システム	加藤健郎 亀山雄高 守谷徳広 井上全人 渡邊誠 <u>松岡由幸</u>	平成17年 3月	デザイン学研究特集号 Vol.12, No.4 pp.89-98	人工関節を使用する患者のQOL (Quality of Life) の向上を目指し、マイクロ・メゾ・マクロスケールの3つのアスペクトから提案した表面、形状、外部デバイスを有する、新しい人工関節システムを提案した。
16.	2人のためのライフサポートビークル	弓矢将成 北村武士 池町優太 日尾僚兵 氏家良樹 古屋繁 <u>松岡由幸</u>	平成17年 3月	デザイン学研究特集号 Vol.12, No.4 pp.80-88	車椅子利用者とそのパートナーの関係における新しいライフスタイルの創生を目指し、基礎研究の技術シーズを活用した「Vehicle-car」と「Vehicle-chair」のインテグレーションによる、新しいビークルシステムの提案を行った。
15.	生命化された手術システム - BIMOS-	松本大 吉原和歌子 氏家良樹 五十嵐浩也 <u>松岡由幸</u>	平成17年 3月	デザイン学研究特集号 Vol.12, No.4 pp.70-79	患者と医師の両者に対する負担が少ない医療を目指し、デザインと工学の二つのアスペクトに焦点を合わせた「基礎研究型協調デザイン」と「生命システムの模倣」の適用による、新しい手術システムを提案した。
14.	慶應先端デザインスクールの試み	<u>松岡由幸</u>	平成17年 3月	デザイン学研究特集号 Vol.12, No.4 pp.67-69	もうひとつのデザインとしての生命デザインをテーマとして行われた、慶應義塾大学先端デザインスクール（プロダクト&システムデザインコース）の概要について述べ、その場での重要な視点となった、「生命から学ぶデザイン」、および「生命システムと人工システムの融合」について言及した。
13.	生命模倣のデザイン - ゲシュタルト, 創発 -	浅沼尚 田尾繁 氏家良樹 井上全人 <u>松岡由幸</u>	平成17年 3月	デザイン学研究特集号 Vol.12, No.4 pp.33-39	ゲシュタルトのような巨視的形狀情報のデジタル化による「デザイン情報のデジタル化」研究の重要性を示すとともに、創発にもとづく「デザインシステムの複合化」研究の重要性を示し、両者にもとづく生命模倣のデザインについて総括した。
12.	もうひとつのデザイン（特集号の趣旨）	<u>松岡由幸</u>	平成17年 3月	デザイン学研究特集号 Vol.12, No.4 pp.1-2	21世紀に増加する非日常のデザインの主な対象として生命デザインが挙げられる。生命デザインを行ううえで従来のデザインプロセスが適用困難であることを述べるとともに、生命デザインのための新しいデザイン研究を取り上げた本特集号の概要および趣旨をまとめた。
11.	オーガナイザとしての所感 - 創造性の意味論と価値論 -	<u>松岡由幸</u>	平成17年 1月	デザイン学研究特集号 Vol.12, No.3 pp.8-9	日本デザイン学会創造性研究部会発足にあたり、オーガナイズドセッションの概要、創造性に関する概念の多様性、創造性の議論における意味論と価値論の混在、について述べ、創造性研究に関する今後の展望をまとめた。
10.	二つのデザイン	<u>松岡由幸</u>	平成17年 1月	日本機械学会誌 Vol.108, No.1034 pp.14-17	「デザイン」に代表されるインダストリアルデザインと「設計」の手段であるエンジニアリングデザインに注目し、これら二つのデザインの発展の歴史やデザイン過程の整理および両者の比較を行った。さらに、両デザインを包含するデザイン学研究のフレームワークを提示するとともに、それを用いて両者の特徴を考察した。
9.	生物に学ぶ人工物設計	<u>松岡由幸</u>	平成10年11月	Boundary Vol.14, No11 pp.22-27	従来の工学的設計方法の有する、未知解や多様解の導出が難しいなどの課題を紹介するとともに、2つの新しい設計方法を紹介した。1つは、構造設計を対象としたボクセルモデルによる自己組織型形状生成方法。もう1つは、意匠設計を対象としたサーフェスモデルによる形状生成方法であり、いずれも研究段階のものであり、両方法の可能性について述べた。

8.	創発デザイン方法	<u>松岡由幸</u>	平成10年 6月	設計工学 Vol.33, No.6 pp.208-213	本稿では、現在の最適デザインにおける要素還元的方法の限界およびデザイン解の画一化を解消すべく新たなデザイン方法を模索した。まず、要素が複雑に作用しあい、多様な種を生み出している生物界に目を向け、その有機組織の発生原理である創発という概念に着目した。次にこの創発過程とデザイン過程の類似性を確認し、デザインを創発的な過程ととらえることにより創発デザインの構造を決定した。さらに、創発デザインをGAや傾斜法など工学的的方法により効率的に進める具体的な方法を考察した。
7.	創発と設計	<u>松岡由幸</u>	平成10年 4月	自動車技術 Vol.52, No.4 pp.87-88	人工物設計を支援すべく、これまで多岐にわたる工学的設計方法の研究が行われてきた。その結果、既知系での最適な設計解を導く方法については多くの研究成果が得られた。しかし、未知系、すなわち従来にはない新しい発想の設計解を導く方法については、模索の段階といえる。このような背景において、従来の工学的設計方法の課題を述べるとともに、創発の概念を応用した新しい設計方法の研究を紹介した。
6.	クルマ	<u>松岡由幸</u>	平成 7年 1月	機械設計 Vol.39, No.1 pp.57-62	本稿では、クルマ開発における感性価値の創生のための設計手法について、事例紹介と方法論についての考察を行った。紹介した事例は、インテリアイメージシステム、車室内コーディネート照明システム、車室内空間の居住性評価システムなどであり、それらの手法を比較することで、上位概念の感性設計手法、感性と機能の共存解を求める手法などについて考察するとともに、それらを実施するためのデザインマネジメントについても言及した。
5.	人体寸法計測項目およびその定義に関するJIS原案成果報告書	林善男 大島正光 谷井克則 <u>松岡由幸</u> その他	平成 4年10月	人間工学 Vol.28, No.5 pp.272-281	平成3年度に工業技術院の委託を受けた人体寸法計測項目の標準化事業について調査研究を実施し、収集した人体寸法計測項目関連の用語、およびその定義などの基礎調査を行った。その結果をもとに、工業製品の設計に関わる人体寸法計測項目および計測点のJIS原案を作成し、平成6年3月にJIS Z 8500「人体寸法測定」を制定した。筆者は、自動車メーカーを代表する形で、クルマ造りの立場から必要な計測項目を明示するとともに、最近のCADデザインの動向を考慮して寸法のとり方や優先度の考え方を提示しつつ、基礎調査に参加した。
4.	シート座り心地の定量化	岩崎信也 <u>松岡由幸</u> 山ノ井利美	昭和63年11月	自動車技術 Vol.42, No.11 pp.1403-1408	自動車用シートの座り心地に関与する物性値を求め、設計因子の選定を試みた。物性値は、体圧分布特性、たわみ・振動特性、および乗員姿勢におけるレイアウト上の数値の中から、官能特性と高相関を示すと同時に、安定したデータ取得可能で開発に活用する上で有利なものを選定した。その結果、選定された物性値は、体圧分布上の腰椎支持割合、共振振動数などの11項目であり、今後の設計因子として活用可能であることを示した。
3.	安楽姿勢に関する研究	花井利通 <u>松岡由幸</u>	昭和62年10月	自動車技術 Vol.41, No.11 pp.1275-1279	自動車用シートの座り心地評価方法の一つとして開発した体圧分布の紹介をし、それを用いた安楽姿勢について考察した。一般に安楽姿勢を確保するために、乗員はシートをリクライニングさせてヒップアングルを増大させる。その際に必要なフィット感確保のための中折れ機能の提案と、それによる効果を体圧分布特性により示すなど、安楽姿勢とそれを具現化するためのシート機能について、検討結果を述べた。

2.	パートナーコンフォートシートの開発	松岡由幸	昭和61年12月	日産技報 No.22 pp.31-37	シート設計要因には評価の個人差が比較的少ない性能要因と、個人差大の嗜好要因が混在しており、この視点から評価構造の解明を試みた。その結果、嗜好要因として抽出されたばね感と硬さ感をもとに層別化した7グループの各評価構造が明らかとなり、シートの嗜好特性を制御する設計法として示した。
1.	内装材の感触について	松岡由幸 青木弘行 上原勝 鈴木邁	昭和61年 5月	自動車技術 Vol.40, No.5 pp.543-548	自動車の内装材として、皮革材料は多用されている。しかしながら、その適用の実態は、天然皮革がその特性を生かして造り込まれておらず、単に記号的価値から採用されている。また、それが原因の1つとなり、天然皮革と代替皮革の使い分けが確に行われていないのが現状である。ここでは、皮革のテクスチャーについて、解析により得られた評価構造や関与する物理特性など、内装に皮革を適用する上での必要な知見の紹介を行った。